

梅の實

水谷年惠子

一

「梅、梅、漬梅」絶え間なく濡らす梅雨の中を、梅の實賣りが呼聲高くふれて行きます。其の叢の中のつぶらな梅の實は、黄ばんだのや、まだ青いのや、熟れさつて赤味を帯びたのや、何れも雨に濡れて、懐しい姿をしてをります。

子供の頃の涼しい味覺が、さつと口中を走ると同時に、甘やかな香が夢のやうに漂つて、いつか心を故郷へ運んで行つて呉れます。

葉かげのまんまるい梅の實を美しいなあと嘆稱するやうになつたのは何時の頃からでしたか、幼

い頃の私は、乳首のやうな頃から、妙に心を惹かれて採りたい念にかられたものでした。圓く大きく、殊に黄ばんで來た頃には、竹竿を持つてはたき落すのが又一つの興味となつて、近所の家の梅の實をねらひ歩いたものでした。

梅の實の賣聲が聞える頃になると、繁みの中ののいゝんだ梅の實をぢいつと見上げてゐる幼い自分の姿を、私は懐しう思ひます。

一一

東北地方の或町の小學校の庭に、大きな梅の樹が一本ありました。其の梅の實が、子供の親指程

になつた頃、先生は梅の實の觀察をさせようと言ふので數十人の子供を連れて、梅の樹の下にお出になりました。

大樹の枝から先生は青い梅の實をもいで、一人一粒づつお分けになりました。子供達は顔一ぱいに喜びの色を湛へて、梅の實を掌のところでろがしてをりました。

「食べてはいけませんよ。まだ青いのでから毒があるかもしれないよ。」

と先生は皆に注意をお與へになりました。

「齒で割つて御覽、中にどんな種が這入つて居るか。」

子供達は、あんと口をあけて梅の實をほうり込みました。齒で割つて若い種を觀察する筈であつた梅の實は、種を観るより先に、齧られて、「食べるんぢやないよ。」といふ先生の注意もよそに、たうとう食べられてしまひました。

「皆食べてしまつたね、誰か食べない子があるかい。あつたら感心な子だ。手を舉げる。」
誰一人手を舉げた者はありませんでした。

これは十何年も前の話ですが、輝く五月の陽の下で、繁りに繁る梅の大樹の下に群つた子供達が、梅の實の一粒を寶と愛で、玉と慈しんでゐる間に、思はずも少しづつ齧り味ふに到つた可愛い姿は、今もなほ私の腦裡に残つて居ります。

二一

梅干を心にした握り飯はうまいものではありませんか、蟹に取換へて貰つた握り飯を、猿はなんぼううまいと思つた事でせう。遠足の朝早く、母が握つて呉れた握り飯を、峠で開いた時の嬉しさ、兩手で捧げ持つて、白い飯を一口食べ、二口食べて、中から梅干の出た時の喜び、知る人のみが知る味ひであります。

白い飯のうまさ、梅干の味の加はつてからの、其の又おいしさ、日本中にも、世界中にも、又とあるまい其のうまさを、楽しむ子供等の上には、晴れたる空に小鳥が鳴き、涼しい聲で松風が歌つて、母の握り飯を一層おいしいものにして呉れまして。

豊葦原の瑞穂の國に生れて、米のまことの味を知らぬ者があつたら、其の人は世にもあはれな人であります。心して味ひ心して噛みしめて見れば、神代から此の方、我等の祖先の噛み味つて来た麗はしい味が、言ひがたい喜びで心を満して呉れます。

此の米の味に、味を添へる物の中で、梅干は又となく優れた物であります。梅干は米の味に、さはやかさとすがすがしさとを添へるものであります。体内に一脈の清涼の氣を齎すものであります。

梅干を心に入れて握つた握り飯に、舌鼓打つて育つた大和の子、大和をみなは、心も健か、身も健かでありました。

彼の明治三十七八年の戦に、我が國が強敵露西亞を破りましたのを見て、列國は驚嘆し、驚異の眼をみはつて、戦勝の原因の那邊にあるかを極めようとなりました。

或者は「大和魂」と言ふものが、其の原因であると言ひ、或者は「教育勅語」がそれであると論じましたが、或者は「日本人は毎日『國旗』を食べてゐるからだ。と斷定しました。白い米の飯の中央に、赤い梅干を一つ据えて、毎日國旗を食べべてゐる日本人は、遂に空前の國力を表はしたのでと言ふのでありました。

四

美味美食に飽きた都の子を、瑞穂の國の大和を

(以下六八頁下段につづく)

る雪白のヒメジョランに對して春開花する桃色のハルジョテンなるものもあります。

その外夏の野草にはよく御承知のつゆくさ、かたばみ、ひるがほ、月見草などがあり。水草にはおもだか、河蓬、鷺草など種々あります。

又金魚や鯉の飼育に必要な藻の類にも色々あります。が中にも金魚藻は美しい種類であります。

こうした暑い夏休にこそ真にゆつくりと種々漫延してゐる野草、水草に對しての色々の情趣は味はふことが出来ませう。

渴つしては裏のトマトも見舞つてやりませう。前月に引きつゞき尙々多數收穫が出来ます。序には餘分の脇芽をつんだり乾燥しすぎて居りますれば夕方涼しい時に敷藁などしてやらなければなりません。

果樹、花物などの仕事としては芽接の時期であります。がその方法などに就きましては又の折にゆ

づりませう。

(六一頁よりつゞく) の子、大和をみなに眼覺めさせる爲には、昔ながらの貴い山や、美しい川に旅させるのがよろしからうと思ひます。そして其の時にこそ、此の握り飯を食べさせるがよろしい。

苦しい道を汗みづくになつて歩き疲れ、飢ゑかつた時に與へられた握り飯に、彼等は生命を得、氣力を新にし、生れて始めて「米」のまことの味を知ることでありませう。一粒の米にかくも貴き力と、美しい味が込められてある事を、心から驚き、且つ感謝することでありませう。

そして其の握り飯の中に秘められた梅干の有難さに、涙を催すことでありませう。

族の天地の此の糧によつて、彼等は始めて直き心と健かなる體とを養ふことを得るであらうと思ひます。